

ジョン・ル・カレ  
©Alamy Stock Photo/amanaimages

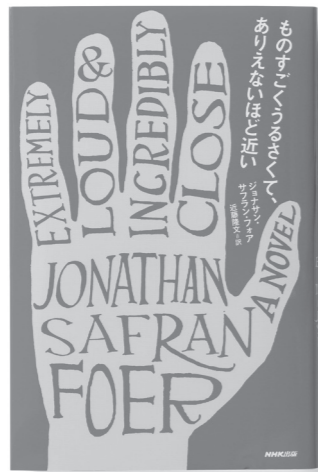
二一世紀は九・一一テロ事件とともに幕を開けた。  
未来の歴史書で今世紀はこのように扱われるのではないか。さらに「このテロをきっかけに、世界じゅうで何十年も戦争が続いた」と書かれないことを望むが、今の世界情勢を見ると真剣に不安になってくる。いたずらに対立を煽る政治家と、それを打算的に利用する組織や企業が至るところで見られるのだから。  
それはともかく、九・一一が二一世紀の歴史

の流れに大きな影響を及ぼした大事件だというのは間違いない。だとすれば、二一世紀の人間の心性にも——そして文学にも——影を落としているはずである。未来の文学史で「九・一一テロ事件の影響と文学」といった項目ができるとすれば、そこに挙がりそうな作品をここでは選んでみたい。  
まずはあの事件を直接扱ったアメリカ人作家のもので、Jonathan Safran Foerの『ものすごくうるさくて、ありえないほど近い』

## 未来の古典としての ジョン・ル・カレ

上岡伸雄 (翻訳家、アメリカ文学研究者)

9・11テロ事件を受けて、現代アメリカ作家たちが描き出した世界は読者の心に深く刻まれた。一方で、この世界における政治的・軍事的な問題の原因を模索する読者も生まれた。  
そんな人々に応える作品を発信し続けているジョン・ル・カレ。もはや「スパイ小説家」とどまらない功績に迫る。



左から『ものすごくうるさくて、ありえないほど近い』ジョナサン・サフラン・フォア (近藤隆文訳、NHK出版) / 『墜ちてゆく男』ドン・デリーロ (上岡伸雄訳、新潮社)



(二〇〇五)。語り手で主人公のオスカー・シエルはニューヨークに住む九歳の少年で、テロ事件のときにツインタワーで父親を失う。想像力豊かで、早熟な知性の持ち主である彼は、父がどう死んだのかを突き止めるため、父と関わった人々を探して町じゅうを歩き回る。作品の第一の魅力はオスカーのユーモラスで饒舌な語りなのだが、そういう形でトラウマが現れ出ているのだとわかってきて、痛切に胸に迫る。オスカーの祖父がドレスデンの空襲で恋人を失うというトラウマを抱えていたり、オスカーが広島と長崎への原爆投下について学校で発表したり、加害者としてのアメリカにも目を向けることで深みが増している。  
もう一つもテロに遭遇した男のトラウマの物語で、ドン・デリーロの『墜ちてゆく男』(二〇〇七)。トレーダーのキース・ニューデッカーはツインタワーで親友の死を目の当たりにし、自身も全身にガラスの破片を浴びながら、他人のブリーフケースを掴んで逃げる。やがて彼は北棟が崩れ落ちていくのを目撃し、自分も同時に崩れ落ちていくように感じる。この九・一一当日の描写と、このあとキースが「墜ちてゆく」(人生から目的が欠落し、不倫やギャングブルにのめり込んでいく)姿が衝撃的だ。一

方、タワーから落ちていく男の姿を再現し、人の神経を逆なでするパフォーマンズ・アーティストが現れたり、テロに至るまでのハイジャッカーたちの生活がスケッチ風に描かれたり、さまざまな視点から九・一一に関わる人間の精神に迫ろうとしている。  
九・一一が人々の心にどのような影響を及ぼしたか。それを鮮烈に描いている点で、これら二作の「主流小説」は「古典」に値する域に到達していると思う。

### スパイ小説が暴く世界

とはいえ、これらは親しい者を亡くしたトラウマといった、普遍的な問題が中心主題であり、テロに関連する政治的・軍事的な問題に迫っているとは言いがたい。そういうことは文学の役割ではないという考えもあるだろうが、だから「主流小説」は世界の複雑な状況を描くのに適していないという意見もある。犯罪小説やスパイ小説のほうはずっとテロの原因やその後の変化に目を向けているではないか、というのだ。確かにデイヴィッド・イグネイシアスの『ワールド・オブ・ライズ』、オレン・スタインハウアーの『ツーリスト』シリーズなど、CIAを扱